

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第118号

イザヤ 65:1

平成17年7月29日

しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民、... を惑わすために出て行き、戦いのために彼らを招集する。彼らの数は海べの砂のようである。彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは、獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御座から逃げ去ってあとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところにしたがって、自分の行いに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々は各々自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。黙示録20：7～15。

十回に亘って考察してきた「キリストの証し人」が知るべき基礎的な教えは今回が最終回です。神の人類救済のための贖いのご計画は「大きな白い御座」での最後の審判でついに幕を閉じることになります。

キリストご自身が支配される何不自由ない公平、平和、充実の『千年の至福の時代』を経験した者の中にも、サタンの神に対する最後の反逆に加担する『神に反逆する者たち』がいて、その数が「海べの砂のようである」とは驚くべきことですが、このことは、究極的に「天の父の御国」を構成する神の家族の一員として受け入れられる前に、人間が最初の人類の墮落以来受け継いできた神への反逆心、すなわち、人間の内なる根源的な罪が、個々人の問題として対処されなければならないことを示唆しています。もはや誘惑、不正、不義、搾取、おどし等、悪が勢力を持つことはなく、勤労の実をそのまま楽しむことのできる「神の国」では、預言者たちによれば、「地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムに上って来ない氏族の上には、雨が降らない」という災いが自分に降りかかるし、また、「百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる」というように、キリストに対する姿勢が直に実生活に影響を及ぼす時代なので、キリストを仕方なく王とし、仕える者たちもいるというところは十分考えられることです。しかし、そのような反抗分子はサタンの声がかかると、待っていましたとばかりキリストに反旗を翻して出陣し、イスラエル、エルサレムを包囲します。ただハルマゲドンの戦いと違ってこのときは直ちに神が御介入されるので、サタンに加担した諸国民は瞬く間に天からの火によって焼き尽くされ、サタン自身もついに「火と硫黄との池」、すなわち地獄に投げ込まれます。ここで本来、サタンと墮天使のために備えられたこの地獄にはすでに、終末の時代の末期に出現する「獣」（反キリスト：真のキリストに敵対する者というのではなく、キリストの座を占め、キリストに成り代わる者）と「にせ預言者」が投げ入れられているということは謎で、おそらく神の深い洞察があるのですが、とにかく『汚れた三位一体』を築き上げていた邪悪な三人が永遠の滅びに落とされることによって、舞台は地上から天界（重力、引力、大気圧に一切左右されない次元）へと急展開します。ちなみに、聖書の語る「滅び」は、よく間違っ
て捉えられているように、永久に存在しなくなる絶滅ではなく、永遠の苦しみであることを明記しておかなければなりません。

ヨハネの黙示録21章以降に描写されている光景は、「地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなく（なり）」、「大きな白い御座」とその前で裁かれる無数の人々ですから、人にとってそのような異次元の世界に存在するためには、特別な体がどうしても必要になります。御座を中心に周囲のものが引き離されるように遠ざかっていく中でその場に留まるには、人間の肉の体では到底無理ということ。そこで第一の復活に与らなかった「死んだ人々」全員が天界の御座で裁かれるために、一瞬の内に霊の体に変えられることになるのです。しかし、キリストを信じた者たちが栄光ある霊の体、永遠に生きる体へと甦らされたのとは対照的に、このときはほとんどの者が滅びるために、すなわち、地獄に落とされるために必要な、不死の体へ甦らされます。人類誕生以来、死んで黄泉に下っていた者たち全員の復活ですから、その数は計り知れないもので、「大きな白い御座」に着座されたキリストによって、個々人が地上にあって自らの肉の体で行ってきたすべての言動が裁かれ、判決が下されます。公義が行われるために、「数々の書物」が開かれることとなりますが、まず筆頭は「神の言葉」でしょう。神の言葉と永遠のいのち（救い）、永遠の裁き（滅び）に関して、使徒ヨハネは鍵となるイエスのメッセージを記しています。「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。だからが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」

(ヨハネ 12:46-50、下線付加)。このイエスのメッセージは終わりの日に、裁き主キリストが人間イエスの温情によってではなく、「神の言葉」という右にも左にも曲げられない絶対基準によって人の言動を裁くことを明らかにしています。預言者エレミヤも「見よ。わたしは、あなたの口にあるわたしのことばを火とし、この民をたきぎとする。」と、神がエレミヤを通してイスラエルの民に語られたご自分の、すなわち、「神の言葉」によって裁かれると反逆のイスラエルに告げ、イスラエル史において確かに預言は成就してきたのでした。

「いのちの書」といえば、イエスが権威を授けて宣教に遣わされた弟子たちが、「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」とこの世での力あるわざを誇らしく喜んだとき、イエスはすかさず、神の救いが大小問わず人間の業によるものでは決してないことを再度悟らせ、「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」と戒められたのでした。このときイエスが言及されたのはおそらくこの「いのちの書」だったのでしょう。もしそうであるとすれば、永遠の命に与る者、救われた者の名が記された書ということになります。ヨハネの黙示録には、「小羊のいのちの書」という表記もありますが、キリストを受け入れた者だけの名が記された書と限定せず、人類史始まって以来救われるすべての者たちの名が記されている書と広範に解釈することができるかもしれません。ヘブル語聖書では、「どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう」と民の罪を執り成すモーセと神との問答の中で、また、ダビデの詩篇の中でも「いのちの書」に言及されています。預言者マラキは、「神に仕えるのはむなしなことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益になろう。今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行っても栄え、神を試みても罪を免れる。」と豪語して、神を恐れようともせず悪を行なう者に対し、神は、「主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、... 記憶の書」を記されたと告げ、神の目を恐れる正しい者たちを励ましましたが、この「記憶の書」には人類史始まって以来の人々の行ないがすべて記録されているのかもしれませんが。

地上で肉の体で犯した罪のすべてが公の場であらわにされ、神の判決を聞くというこの厳しい裁きの座に立たされる者たちの中で、果たして永遠の命、救いの判決を受ける者がいるのでしょうか。そのような例外は、キリスト支配の千年期の間、「キリストの証し人」として死んだ者たちと、旧約の時代、「神の言葉」に耳を傾けたシェバの女王や預言者ヨナの警告に耳を貸し、悔い改めたニネベの人たちに象徴される異邦人でしょう。また万が一、この最後の死者の甦りの中に、地上に生あるときキリストを告白しながら、背信には陥らなかったものの、父なる神の御旨を行なわなかった『自称クリスチャン』が混じっていたとしたら、彼らの行く先は救いか滅びかどちらでしょう。彼らは、自らの言動に応じて裁かれるとしたら間違いなく滅びでしょうが、この地上にあるとき自分の罪を認め、イエスをキリスト、すなわち自分を罪から贖う「救い主」として受け入れ、告白して行ったことによって裁きの座に立たされることなく、いわば無条件で、永遠の命の判決を受けることになるでしょう。このキリストにつながっている者の特権、福音をヨハネは、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」(ヨハネ 3:16-17、下線付加)と教え、キリストご自身も、「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます... まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:21-24、下線付加)と言明されたのでした。この地上にいる間にイエスをキリストと告白し否定することがなければ、間違いなく、『滅びに至る裁き』を免れることができるのです。

最初的人类以来、死者の居場所はハデスといわれる黄泉ですが、ハデスからだけでなく、休まることを知らない群衆、邪悪な諸国民の象徴として聖書では用いられている「海」からも、裁かれるために死者が送り出されてくるとヨハネは冒頭に挙げたくだりて預言しています。海(湖)と悪霊とに何らかの関係があることは、湖に突如として起こった大暴風がイエスの命令によって静まった話とか、イエスの除霊の業によって人から追い出された悪霊が豚にのり移り、崖から湖へなだれ落ち溺れ死んだ話などから明らかですが、ここで海がはじき出す死者とは、ノアの洪水で滅びた「不敬虔な世界」の者たちの肉体を失った特殊な霊ども(ネフィリムの霊)のことかもしれません。ペテロは、「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、裁きの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました」と、「タルタルス」という邪悪な天界の被造物、墮天使が裁きのときまで閉じ込められている「穴」に言及していますが、最後の審判のときには、海からも、タルタルスからも、ハデスからも死者が御座の前に投げ出され、人類を長く苦しめてきた「死」そのもの、死者の雑居所であった「ハデス」自体も、時の次元の外に属する永遠(時に拘束されない異次元)の「火の池」地獄に投げ込まれ、すべての邪悪なものが、神から完全に切り離されることとなります。人間にとって、いわゆる『肉体の死』が「第一の死」で、肉体と靈魂との分離を意味するのであれば、「第二の死」とは靈魂が神から引き離される『霊の死』ということになります。「第二の死」が宣告された者たちは、サタン、墮天使、悪霊とともに、不死の霊の体が永遠に苦しむ場所である地獄(ゲヘナ)に投げ入れられ、「永遠のいのち」に与った者たちとは二度と交わることはない隔離になります。しかし、今まだこの地上に生きている私たちは、神が人間の中から邪悪な者たちを地獄に送られるというのではなく、神は預言者たちを通して始終メッセージを語ってこられたし、また、この瞬間にも「神の言葉」聖書を通して語っておられるにもかかわらず、聞こうとしないため、人間は自分から地獄に向かっているということを銘記しなければなりません。「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったのです、すでにさばかれています。」とヨハネが警告しているのは、まさにこのことなのです。